

クライストの Anekdote について

(その一)

工 藤 幹 巳

クライストの時代は、Anekdote (逸話) の概念が未だ成立しえない時代であったが、そういう当時において最も明確にこれを規定しているのは、フリードリッヒ・シュレーゲルであると思われる。彼は次のように言っている。¹⁾

「Anekdote とは、仲間うちで話すであろうように話される未だ知られざる話 (Geschichte) であり、国家や時代との関連とか、人類の進歩及びその形成に対する関係とかにはいささかも顧慮せず、それ自体すでに個別に興味をひくことができるものでなければならぬ話である。すなわち、厳密に考えるなら Geschichte には属さず、イロニーの素質というものが生まれつきそなわっている話である。興味をひかせるべきものであるから、多くの人にとって注目に値するものか、あるいは好きになることのできる何かを、その形式の中に含んでいなければならない。」

概念の未成立期であるとは言え、当時、新聞・雑誌のほとんどどの号も Anekdote を掲載しているし、さらには Anekdote 集も出版されるなど、この小文学ジャンルは大いに喜ばれ読まれたものであった。読者の需要に追いつかないため、ひんぱんに転載しあったほどである。ゲーテも次のように述べている。

「Anekdote と Maxime (処生訓) とは、世人にとって最大の宝である。もし彼が前者の宝 (Anekdote) を適当な個所でちりばめ、後者の宝 (Maxime) を適切な場合に思い出すことができるなら。」

このように愛読された Anekdote を、クライストが「ベルリント刊新聞」に掲載したのは当然のことと思われる。なぜなら、「民衆の新聞にし、民衆

を楽しませ、さらには民衆のために書かれてはいない他の記事をも通読するよう、民衆を刺激する」²⁾のことに「夕刊新聞」の目的を置いていたクライストにとって、「民衆を楽しませる」のにこれほど好個の材料を提供するものはなかったであろうと思われるからである。

ところでクライストは、Anekdoten を書く際に、警察公報、新聞、他の Anekdoten 集、等をその典拠としているのだが、重要なことは、彼の場合、他の編著者たちと違って、それら原典としたものの字句、表現をそのまま模写転載したものが一つもない、ということである。内容的に変わらないのは当然としても、原典となった Anekdoten の表現はすべてクライストの手によって書き換えられているのである。

したがって、クライストが手がかりとした原典と彼自身のものとを比較検討することは、「民衆を楽しませる」ためにクライストがどのような配慮をしたのかを知ることであり、ひいては彼の散文の構成を知る上でも、極めて重要なこととなるであろう。本論はこのような観点に立ってクライストの Anekdoten の分析検討を試みるものである。

クライスト自身が Anekdoten と名づけたものは、次の 11 編である。

○Der Verlegene Magistrat. Eine Anekdote.

○Anekdote aus letzten preußischen Kriege.

○Mutwille des Himmels. Eine Anekdote.

○Der Branntweinsäufer und die Berliner Glocken. (Eine Anekdote.)

○Anekdote aus dem letzten Kriege.

○Anekdote (Bach)

○Anekdote (Baxter)

○Anekdote (Kapuziner)

○Anekdote (Jonas)

○Anekdoten (Napoleon)

○Anekdoten (Diogenes)

このうち本稿では、「Anekdoten aus dem letzten Kriege」「この前の戦争からの逸話」を取り上げることとする。

1. “Anekdoten aus dem letzten Kriege”について

クライストのこの Anekdoten の原本となったのは何か、という問題はこれまで曲折の道を辿ってきた。シュタイクは、「1805, 6, 7 年に起きた南独及び北独での二つの注目すべき戦争からの逸話集」(Sammlung von Anekdoten und Charakterzügen aus den beiden merkwürdigen Kriegen in Süd-und Nord-Deutschland in den Jahren 1805, 6 und 7 (以下, “Sammlung” と略記する) という長い名前の Anekdoten 集の中に、この Anekdoten と同じような勇敢な軽騎兵の話を発見し、それをクライストの原典と見なした。³⁾ ゼンプトナーもこれを認める立場をとっていたが、⁴⁾ のちに訂正して、その原典は「シュプレー河畔の観察者」(Beobachter an der Spree. 以下, 「観察者」と略記する) であるとした。⁵⁾ その理由は、シュタイクの指摘した Anekdoten を掲載している “Sammlung” の27号は1810年11月16日付発刊であることが判明したところにある。すなわち、クライストがこの Anekdoten を「ベルリント刊新聞」紙上に発表したのが1810年10月20日であるため、前後関係の矛盾が生ずるわけである。

一方、1810年10月22日付の「観察者」にも同じような話が載っているが、シュタイクは、これも “Sammlung” からの複製であって、クライストのものと同様にほぼ同じくするのは、「当時この話がベルリンで好まれたため」であるとしている。しかしこれもゼンプトナーにあっては逆転する。一つには先にあげた発刊日付の点からである。そして、たとえクライストのいくつかの Anekdoten が “Sammlung” を手がかりとしていたことが知られているにせよ、これら二つの出版物が互いに無関係に同じ話を同時に取り上げること

など、とてもあるとは思えない、と述べて、「観察者」こそがクライストの参考としたものであるとしている。

その根拠としては、「観察者」は週刊誌で、プロイセン国以外の読者を考慮に入れてもともと発刊日付は二・三日先の日付がつけられていること、及び「観察者」が「ベルリント刊新聞」に対し、転載の際の改竄を非難している記事を載せていること、⁶⁾ とをあげている。つまりシュタイクにあっては、クライストの Anekdote と「観察者」のものとは、共に “Sammlung” を原典としたものと解されていたのだが、ゼンプトナーは、クライストのものと “Sammlung” のものが「観察者」を元にしたのだ、と主張しているのである。本稿は、「観察者」をクライストの原典と見做すゼンプトナーの立場をとり、この両者を比較対象とするものである。

この Anekdote においてもクライストは、“Sammlung” とは違って、原典の「観察者」をそのまま転載してはいない。そしてそれゆえに「観察者」の編集者から、先に触れたように、改竄のそしりを受けることになるのである。

それでは両者の本文と訳とを次にあげよう。

○「観察者」に掲載された Anekdote の本文

➤ Wahre Anekdote aus dem letzten Feldzuge.

Ein Tambour des preußischen Infanterie-Regiments von Puttkammer zu Brandenburg geriet nach der Schlacht von Jena in französische Gefangenschaft. Er fand aber doch Gelegenheit, wieder zu entweichen und sich in den Besitz eines Gewehrs und scharfer Patronen zu setzen. So bewaffnet, suchte er sich nun, mitten in dem Getümmel des Krieges, nach seiner Heimat durchzuschleichen und, wo er Widerstand fand, sich den Weg mit Gewalt zu bahnen. Dies glückte ihm auch einige Tage über und er streckte manchen Feind

zu Boden. Endlich wurde er aber doch von einem Kommando baierischer Soldaten zum Gefangenen gemacht und da es ausgemittelt wurde, daß er aus der ersten Gefangenschaft entwischt sei und nachher manchen getötet, so wurde er durch ein Kriegsgericht verurteilt, fusiliert zu werden.

Nachdem man ihm diese Sentenz publiziert hatte, wurde er zum Richtplatz geführt. Unerschrocken schritt er einher, und als er zu dem, das Exekutionskommando anführenden bairischen Offizier kam, stand er still und bat; ihm noch vor seinem Tode eine Gnade zu gewähren. Der Offizier bewilligte ihm seine Bitte. >Nun so bitt ich,< versetzte der zum Tode Verurteilte: >mich im Hintern schießen zu lassen, damit der Balg ganz bleibe.<<

○日本語訳

「この前の戦役からの本当の逸話。

プロイセンのブットカマー歩兵連隊の或る鼓手が、イエーナの戦闘後、フランス軍の捕虜となった。しかし彼は、再び脱走して、銃と強力な弾薬とを手に入れるチャンスを得た。さて彼は武装して、戦いの混乱の中を、自分の故郷へ忍び帰ろうとし、抵抗のある所では力づくで道を切りひらいていった。こういうことがそれでも二三日はうまく続き、彼は多くの敵を打ち倒したのだった。しかしとうとう、彼はバイエルン兵の分遣隊に捕まり、脱走した上に多くの者を殺したことを告げられたので、彼は軍法会議によって銃殺刑に処せられると宣告された。

この判決文が読みあげられたのち、彼は刑場へ連れて行かれた。彼はたじろぐこともなく、ゆうゆうと歩を進めた。そして処刑執行隊を指揮しているバイエルンの将校の所へ行くと、静かに立って、死ぬ前に一つだけ情けを与えて頂きたい、と願った。将校は彼の願いを受け入れた。『それで

は、お願いしますのは』と死を宣告された者が答えた、『皮が無傷で残るように、尻を撃つよう命じてほしいのです。』』

○クライストによる Anekdote の本文

ANEKDOTEN AUS DEM LETZTEN KRIEGE

Den ungeheuersten Witz, der vielleicht, so lange die Erde steht, über Menschenlippen gekommen ist, hat, im Lauf des letztverflossenen Krieges, ein Tambour gemacht; ein Tambour meines Wissens von dem damaligen Regiment von Puttkamer; ein Mensch, zu dem, wie man gleich hören wird, weder die griechische noch römische Geschichte ein Gegenstück liefert. Dieser hatte, nach Zersprengung der preußischen Armee bei Jena, ein Gewehr aufgetrieben, mit welchem er, auf seine eigne Hand, den Krieg fortsetzte; dergestalt, daß da er, auf der Landstraße, alles, was ihm an Franzosen in den Schuß kam, niederstreckte und ausplünderte, er von einem Haufen französischer Gensdarmen, die ihn aufspürten, ergriffen, nach der Stadt geschleppt, und, wie es ihm zukam, verurteilt ward, erschossen zu werden. Als er den Platz, wo die Exekution vor sich gehen sollte, betreten hatte, und wohl sah, daß alles, was er zu seiner Rechtfertigung vorbrachte, vergebens war, bat er sich von dem Obristen, der das Detaschement kommandierte, eine Gnade aus; und da der Obrist, inzwischen die Offiziere, die ihn umringten, in gespannter Erwartung zusammentraten, ihn fragte: was er wolle? zog er sich die Hosen ab, und sprach: sie möchten ihn in den... schießen, damit das F... kein L... bekäme. — Wobei man noch die Shakespearische Eigenschaft bemerken muß, der Tambour mit seinem Witz, aus seiner Sphäre als Trommelschläger nicht herausging.

○日本語訳

この前の戦争からの逸話

恐らくはこの世のある限り、人々に語り継がれるであろう途方もない機知あふれたことを、この前あった戦争のさ中に、或る鼓手がやったのだった。私の知るところでは、当時のプットカマー連隊の鼓手が。すぐわかるであろうように、ギリシャ、ローマの物語もこの人には及ばない、そんな一人の人間が、である。この男は、イエーナにおけるプロイセン軍の敗退ののち、銃を手に入れ、それでもって自らの手で戦争を続けた。その結果は、彼が公道でフランス人と出くわすと、すべてを打ち倒し、略奪し尽したので、彼は、フランスの憲兵の一団に見つけ出され、捕まって町へ引っぱって行かれて、当然ながら、銃殺刑を宣告された。処刑が行われる広場へ足を踏み入れ、自己弁護のために申し出たことのすべてが無駄であったことがわかると、彼は、分遣隊を指揮している連隊長に、一つだけ情けを請うた。そして、彼を取り巻いている将校たちが緊張しつつも期待しながら集まってくる間に、連隊長は彼に、何が望みか？とたずねた。そこで彼はズボンを脱ぎ、こう言った。F… にL… があかないように、自分の…を撃っていただきたい。——この場合われわれは、鼓手はこの機知でもって、彼の太鼓叩きとしての領分からはみ出なかった、というシェークスピア的特質に気づかねばならない。

全体的比較からわかることは、「観察者」が9個の文（以下、Satz 1～9と呼ぶこととする）から成り立つのにたいして、クライストの方は4個の文から成っている。これを内容的な相関々係から比較してみると、下図のような関係にあり、「観察者」の Satz 1～5はクライストの Satz 2に、Satz 6～9は後者の Satz 3に相当することがわかる。したがって、全体としてはクライストの方が量的に多いわけであるが、この相関々係から考えればむしろ、クライストは「観察者」をより短かく書きなおしたと見ることもできる

「観察者」		クライスト	であろう。Satz 1 および 4 をクライストが独自に書き加えることによって、全体として長くなったのである。
Satz	1	1	
	2		
	3		
	4		
	5	2	
	6		
	7	3	
	8		
	9	4	

一) クライストの Satz 1

この文は主人公の鼓手 (Tambour) が、途方もない (ungeheuerlichst) 機知あふれたことをしたこと、およびその鼓手の紹介である。

ここではまず冒頭に 4 格目的語 (Witz) がきて、それを修飾する関係文が続くのであるが、この関係文は、4 格目的語の付加形容詞で絶対最高級を使った大仰な言葉 “ungeheuerlichst” を説明すると共に、さらにその大仰さを倍加させるような意味内容をもっている。「この世のある限り～」という表現で明らかであろう。さてこれらが述べられたのち、定動詞 (hat) が出てくるのだが、主語はすぐには続かず、この「機知あふれたこと」が生じた「時」を、「この前あった戦争のさ中に」 (im Lauf des letztverflossenen Krieges) と報告する。そうしてはじめて主語 (Tambour) が登場する。

この場合のように、主語が文頭に出て来ないで、目的語や副文章などが書かれるのは、クライストにあっては、極めて頻繁に使われる書き方である。「観察者」の冒頭の書き方と比較すれば明白のように、クライストの文の方が、読者の関心を強くひきつける力を持っている。

さて次に、hat...ein Tambour gemacht; ein Tambour + 句; ein Mensch + 関係文、というように、主語があらわれた直後にセミコロンを置き、主語と同格の語を 2 回 (ein Tambour, ein Mensch) くりかえす。主語と次の同格語 (ein Tambour) とは、極く近い所に置かれ、しかも同じ語のくりかえしである。そしてこの同格語の次には、鼓手の所属部隊を手短かに句で説明する。二番目の同格語 (ein Mensch) に伴う関係文では「(この人

間には)ギリシャ、ローマの物語も及ばない」と言って讀えるのだが、この時同格語には「鼓手」を使わず、「人間」を用いている。それはこの関係文の内容から、鼓手あるいは兵士といった特定の立場にある人として見るより、讀えられるべき一人の「人間」として見ているからだと解釈できよう。

このようにクライストの Satz 1 は、「観察者」にはない文構成・叙述内容をもって、まず読者の注意を喚起し、関心をひきつけるのである。

二)「観察者」の Satz 1～5 とクライストの Satz 2

「観察者」の全体の約 3 分の 2 を占める Satz 1～5 を、クライストは長文ながら 1 文にしてしまっている。しかも語数にして約半数(前者 121 語、後者 65 語)という大胆な削減である。したがって当然ながらそこには、「観察者」で述べられていることを述べなかったり、用語を適宜換えたり、副文を使用したりしている個所が多く見られる。それらを次に列挙してみよう。

○クライストによって削除された表現

- ①「フランス軍の捕虜となった」(Satz 1: geriet……in französische Gefangenschaft)
- ②「脱走するチャンスを得た」(Satz 2: fand……Gelegenheit, wieder zu entwischen)
- ③「(武器と)弾薬とを手に入れる」(Satz 2: sich in den Besitz [eines Gewehrs] und scharfer Patronen zu setzen)
- ④「故郷へ帰ろうとした」(Satz 3: suchte…sich, …nach seiner Heimat durchzuschleichen)
- ⑤「二三日はうまく行き」(Satz 4: Dies glückte ihm auch einige Tage über.)
- ⑥「脱走した上に多くの者を殺した、と伝えられたので」(Satz 5: da es ausgemittelt wurde, daß er aus der ersten Gefangenschaft entwischt sei und nachher manchen getötet)

⑦「軍法会議によって（判決が下された）」（Satz 5 : durch ein Kriegsgericht）

これら「観察者」に存在する叙述が、のちに続くポイント部分にとって、その前段階として不可欠の叙述なのかどうか考察せねばならないが、これについてはそのポイント部分を見た上で述べることにする。

○クライストによって書き換えられた表現

⑧Satz 2 と 3 のつながり : So bewaffnet, ~ → 関係文 : ~, mit welchem ~

⑨Satz 3 と 4 → 接続詞 da に導かれる副文で 1 文に

⑩Satz 5 : beierscher Soldaten → französischer Gensdarmen

⑪Satz 5 : füsiliert werden → erschossen werden

⑫Satz 2 : sich in den Besitz ~ setzen → auftreiben

⑬Satz 3 : sich suchen, ~ zu tun → tun

⑭Satz 4 : zu Boden strecken → niederstrecken

⑮Satz 5 : zum Gefangnen gemacht werden → ergriffen werden

⑯Satz 5 : ~ wurde ~ gemacht und da ~ ausgemittelt wurde, ~, so wurde ~ verurteilt, ~ → ~ ergriffen, ~ geschleppt, und ~ verurteilt ward

このうち、⑧⑨は副文の使用による削減であるし、⑩については、ナポレオンからの祖国解放を悲願としていたクライストを想えば、容易に首肯しうるであろう。

⑪から⑮まで（ここでは不定形で示した）の部分が特に顕著で、「観察者」で多く使用されている zu 不定詞や前置詞句を伴う熟語あるいは慣用句などを避け、より平易で一般的な表現に換えている。本来 Anekdote は出来るだけ簡潔に物語るものである。「観察者」の表現に比較して、クライストのそれの方が簡潔であることは疑いえないところである。

このことは⑩についても言えることである。受動文の助動詞 werden を 1 個にしたことで、文章全体が引き締まり、読めば明らかなように、流れもなめらかになっている。なめらかな流れに乗って、緊張が持続し、緊迫感が増大するのである。

こうして、鼓手が銃を取って戦うところから銃殺刑を宣告されるところまでが、クライストにあっては 1 文の中に組み入れられる。

三) 「観察者」の Satz 6～9 とクライストの Satz 3

この Anekdote のポイントとなる場面が展開される重要な個所であるが、ここでもクライストは大幅な書き換えを行なっている。しかし、削除された表現は前項の場合より少なく、全体の語数で比較しても逆にわずかながら増やしている（「観察者」67語、クライスト76語）ほどで、この場面にクライストがどれだけ力点を置いたかがわかろうというものである。

○クライストによって削除された表現

⑪「この判決文が読みあげられたのち」(Satz 6 : Nachdem man ihm diese Sentenz publiziert hatte)

⑫「彼はたじろぐこともなく、ゆうゆうと歩を進めた」(Satz 7 : Unerschrocken schritt er einher)

⑬「将校の所へ行くと、静かに立って」(Satz 7 : als er zu dem ~ Offizier kam, stand er still)

⑭「死を宣告された者」(Satz 9 : der zum Tode Verurteilte)

○クライストによって書き換えられた表現

⑮Satz 6～7 : ~ wurde er zum Richtplatz geführt. Unerschrocken schritt er einher, ~ → Als er den Platz, wo die Exekution vor sich gehen sollte, betreten hatte, ~

⑯Satz 7 : zu dem, das Exekutionskommando anführenden bayersch-

en Offizier → von dem Obristen, der das Detaschment kommandierte,

㉓Satz 7: und bat: ihm noch vor seinem Tode eine Gnade zu gewahren → bat er sich von ~ eine Gnade aus

㉔Satz 8 全文: Der Offizier bewilligte ihm seine Bitte. → da der Obrist, ~, ihn fragte: was er wolle?

㉕Satz 9: 直接説話 → 間接説話

㉖Satz 9: im Hintern schießen → in den... schießen

㉗Satz 9: der Balg → das F...

㉘Satz 9: ganz bleiben → kein L... bekommen

○クライストによって新たに書き加えられた表現

㉙「自己弁護のために申し出たことのすべてが無駄であったことがわかる」と (~ und wohl sah, daß alles, was er zu seiner Rechtfertigung vorbrachte, vergebens war, ~)

㉚「彼を取り巻いている将校たちが緊張しつつも期待しながら集まってくる間に」 (inzwischen die Offiziere, die ihn umringten, in gespannter Erwartung zusammentraten,)

㉛「彼はズボンを脱いだ」 (~ zog er sich die Hosen ab)

以上のうち、削除されたもののなかで㉗はいわば全く不要というべき叙述であるが、㉘㉙を削除したことは少なからぬ影響を及ぼしている。すなわち、これらの表現によって主人公のいさぎよさ、堂々とした態度が表わされているわけだが、これらを削除し、そのかわりに、書き加えられた部分のうち㉚に見られるように、逆に主人公の生に執着するいさぎよくない様子を表現している。

だがしかしこのことは、「観察者」の Satz 3 で「戦いの混乱の中を、自分の故郷へ忍び帰ろうとし」と言われているのに対して、クライストの Satz 2

では「自らの手で戦争を続けた」となっている点と考えあわせると、一層興味深いものとなる。すなわち、「観察者」では、主人公の戦いは始め故郷へ帰ろうとするための、いわば消極的なものとして起こされるのだが、先に見たように、後半の処刑場では、堂々とした姿へと変わっていく。これに対してクライストの主人公は、始めは積極的に戦いを進めていく者として描かれる。「故郷へ帰ろうと」などとは言われていないように、本来武器を持たぬであろう鼓手が味方の敗退にもかかわらず銃を取り、ひとり戦い続ける勇者の姿をとっている。しかし後半では、死を前にして「弁明」のためにあらゆる手だてをつくす、いわば弱い存在として描かれている。ちょうど「観察者」とは逆の描き方なのである。

この場面はまた、自分を埋める墓穴が掘られているのを見て、名誉も体面も捨てて命乞いをする勇士、公子ホンブルクの姿を想起させる。それまで国民の偶像であったホンブルクを、はじめて人間として描いたクライストは、この Anekdote においても、名も無き一鼓手を、勇士として、また弱い者として、いかにも人間的に描出していると言えよう。

ところで「観察者」では、最後の鼓手の言葉を直接説話で (Satz 9)、しかも「尻を撃つ」(②⑥)とか「皮が無傷で残るように」(②⑦②⑧)というように、正に直接的な表現をしているのであるが、クライストはこども全く換えている。間接説話で、しかも「彼はズボンを脱いだ」(③①)という表現を書き加えることによって、②⑥②⑦②⑧にあるように露骨な表現を避けているのである。避けているというより、明記する必要がないのであろう。なぜなら、「ズボンを脱いだ」という彼の動作がすべての理解の鍵となるであろうからである。人物の心の動きをその動作で表現することの得意なクライストにとって、これらの伏せ字部分にそれぞれ Hintern (尻), Fell (皮), Loch (穴) などと書くことは不必要であったのであろう。また、この動作の叙述によって、クライストの主人公は、直接的な語を使わないがゆえに、それだけ品位ある存在となっている。

㊸の直接説話から間接説話への書き換えにも触れねばならない。これについて、㊸、すなわち「観察者」の Satz 8 が平叙文であるのに、これをクライストが間接説話にしていること、と相関的に考えるべきである。クライストの場合、死刑執行を指揮する連隊長にも、間接説話ながら *was er wollte?* という発言が与えられている。この質問と、すぐこれに続く鼓手の答え（間接説話）との対話によって場面の人物像が鮮明になってくるのである。この一言によって連隊長は、その存在感を増すことになるのだと言える。

また㊸の書き加えも、周囲の人物をこの場面に登場させ、さらにその動きを描写することで、場面に奥行きと広がりを与えている。

このようにポイント部分をみると、先に留保しておいた①～⑦の削除の妥当性の問題も自ずから解決するであろう。これらをポイント部分の前段階として叙述することが不可欠であると言い難いのである。事件を簡潔に描写することが *Anekdote* にとっては最も重要な要素だからである。

四) クライストの Satz 4

前述したように、この Satz 4 は Satz 1 と同様クライスト自身による書き加えである。厳密に言うなら、Satz 1 が「観察者」で言われていることを土台にしてそれに書き加えた形をとっているのに対し、Satz 4 は全く新たな書き加えである。何故にクライストがこの文を書き加えたのかを考えてみるなら、第一に、すぐ前に出てくるあの伏せ字へのヒント、という意味にとらえることができる。「鼓手は太鼓叩きとしての領分からはみ出なかった」と言うことによって、読者をして太鼓を連想させ、その皮を想わせる。「太鼓叩きとしての」というとき、これまで使っていた語 *Tambour* (鼓手) ではなく、初めてそして唯一度 *Trommelschläger* (太鼓叩き) と言い換えている点から、そういう連想が浮ぶであろう。そうすることによって、*das F...* や *kein L...* がそれぞれ、*das Fell* (皮) であり *kein Loch* (*Loch*=穴) であ

ると気づかせるのである。

第二に, Satz 1 で, 鼓手のしでかした機知を「この世のある限り人々に語り継がれるであろう」と讃え, 「(この人間には) ギリシャ, ローマの物語も及ばない」と讃美したことを受けて, 最後にこの Satz 4 で締めくくっている, と考えられる。もし Satz 4 がなかったとしたら, Satz 1 での大いなる讃美があるが故に, 最終的にまとまりのない Anekdote になっていたであろう。そうであつたらむしろ, 「観察者」のように始めから讃美の言葉など入れず, 鼓手の言葉で終わらせた方が, 余韻をもたせるという意味で, はるかに効果的である。

余韻効果という点では, 他の Anekdote, 例えば Franzosen-Billigkeit や Bach-Anekdote, Baxer-Anekdote などに比較して, この Anekdote は少し劣るかもしれない。しかし, 伏せ字を使い, その前後でヒントを与え, 一種の「謎解き」の面白さによって, 読者に関心と想像とを惹き起こさせる, という点で優れていることは疑いえないのである。

使用テキスト

Heinrich von Kleist, Sämtliche Werke und Briefe. Herausgegeben von Helmut Sembdner 2. Bd. (Wissenschaftliche Buchgesellschaft Darmstadt 1970)

注

- 1) このシュレーゲルの引用と次のゲーテの引用とは, Heinz Grothe, Anekdote (Sammlung Metzler Band 101), S. 6 に拠った。
- 2) Brief an Eduard Prinz von Lichnowsky, den 23. Okt. 1810
- 3) Heinrich von Kleist's Berliner Kämpfe. Reinhold Steig (neu-verlegt bei Herbert Lang Bern 1971.) S. 343-345
- 4) Die Berliner Abendblätter Heinrich von Kleist's, ihre Quellen und ihre Redaktion. H. Sembdner (Schriften der Kleist-Gesellschaft Bd. 19

Unveränderter Nachdruck. Amsterdam/John Benjamins 1970) S.87

5) In Sachen Kleist. Beiträge zur Forschung. H. Sembdner (Carl Hanser Verlag München 1974) S.104

6) 注4) と同文献, S.20—23にゼンプトナーは「観察者」の記事を引用している。「観察者」はベルリンで発行されていた週刊新聞で、ゼンプトナーは「スキャンダル新聞」であるとしている。1810年11月19日付の「観察者」は、クライストの「ヘルリント刊新聞」に対するパロディを掲載した。その中で、創案しないで手軽に書き写したという印象を与えないために、自分たちの新聞から逐字的でない抜粋をしている、と強い言葉で非難している。